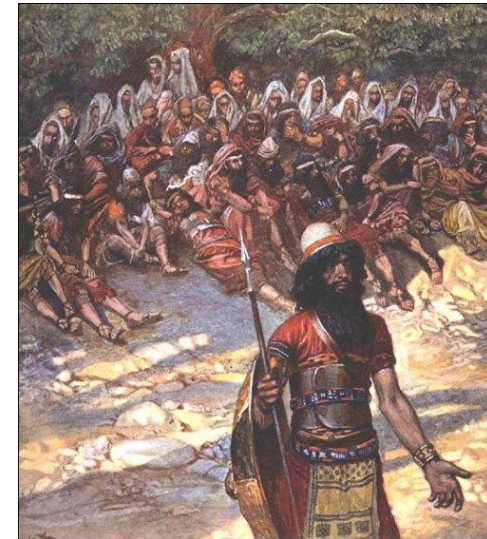


## 士師記 通読

5月



(5月30日)「士師記16:10~14」

デリラはサムソンに言った。「あなたはわたしを侮り、うそをついたでしょう。あなたを縛り上げるにはどうすればいいのか、今教えてください。」

(士師記16章10節)

・デリラはサムソンの怪力の秘密を聞き出そうとします。しかしさすがにサムソンは、教えようとはしません。昨日の箇所では「乾いていない新しい弓弦七本で縛ればよい」と伝えます。

・そして今日の箇所では「まだ一度も使ったことのない新しい縄でしっかりと縛れば」、また「わたしの髪の毛七房を機の縦糸と共に織り込めばいいのだ」と、サムソンは説得力のあるウソをデリラにつきます。

・ただその度ごとに、「サムソン、ペリシテ人があなたに」という声に反応してサムソンはそれらのものを断ち切ったり、引き抜いたりしてしまいます。彼はまだ、本当の秘密を打ち明けてはいないのです。

(5月31日)「士師記16:15~22」

彼女は膝を枕にサムソンを眠らせ、人を呼んで、彼の髪の毛七房をそらせた。彼女はこうして彼を抑え始め、彼の力は抜けた。

(士師記16章19節)

・デリラはサムソンに、どうして本当のことを言ってくれないのかと詰め寄ります。どうして本当のことを知りたいのか？とサムソンが疑問に思えばよかったです。恋は盲目ということでしょうか。

・ついにサムソンは、デリラに本当の秘密を打ち明けてしまいます。それはナジル人として伸ばし続けた髪の毛に秘密があるということです。髪の毛をそらされたら、力は抜け、弱くなり、並の人間になってしまうということです。

・デリラはサムソンが本当の秘密を打ち明けていることを悟り、人を呼んでサムソンの髪をそらせます。その結果サムソンから主は離れ、ペリシテ人によって捕らえられてしまいます。この状況を映像でご覧になりたい方は、「サムソンとデリラ」という映画をご覧ください。

(5月1日)「士師記9:6~15」

シケムのすべての首長とベト・ミロの全員が集まり、赴いて、シケムの石柱のあるテレビンの木の傍らでアビメレクを王とした。(士師記9章6節)

・70人の兄弟(末の子ヨタムだけは身を隠して生き延びましたが)を殺害したアビメレクは、王となりました。この頃イスラエルには、王はいませんでした。それは神さまこそが本当の王であると考えていたからです。

・アビメレクが王となったのを聞いて、生き延びた末の子ヨタムはゲリジム山の頂に行って立ち、大声を張り上げて言います。その内容は、シケムの人たちがアビメレクを王としたことへの批判です。

・オリーブやいちじくやぶどうといった木は、「王になってくれ」と言われてもそれを断るでしょう。それらの木は、イスラエルの正しい人のことです。しかしアビメレクは茨であり、その火によってあなたたちも燃やされてしまいますよ、と警告するのです。

(5月 2日)「士師記 9 : 16~20」

わたしの父はあなたたちのために戦い、命をかけて、あなたたちをミディアンの手から救い出した。

(士師記 9 章 17 節)

・「わたしの父」というのは、エルバアル (ギデオン) のことです。彼は確かに士師として、イスラエルを救い、また導きました。しかし彼は異教の神にも仕え、その結果人々も姦淫にふけり、バアル・ベリトという異教の神を自分たちの神としてしまいます。

・そのようなことがあり、神さまはイスラエルに分断を与えられたのかもしれませんが、そもそも 70 人も息子がいることで争いが起きないわけがないのです。エルバアル (ギデオン) は、子孫に対して必要な備えをすることができなかったのです。

・ヨタムはシケムの首長たちに対して、アビメレクを王としたことへの批判を繰り返します。ただヨタムは末の子でしたので、シケムの人たちはその言葉を聞いてもそれほど恐れなかったようです。

(5月 3日)「士師記 9 : 21~29」

ヨタムは逃げ去った。彼は逃げてベエルに行き、兄弟アビメレクを避けてそこに住んだ。

(士師記 9 章 21 節)

・ヨタムはシケムの首長たちの前でアビメレクを王としたことを批判した後、ベエルに住みます。ヨタムはここから自分で行動することはありませんが、その呪いの言葉を神さまは聞かれました。

・アビメレクはイスラエルを支配しますが、自分を王として立てたシケムの首長たちとの間に、不穏な空気が流れます。首長たちはアビメレクを待ち伏せし、襲う者を配置するようになりました。

・そのとき、エベドの子ガアルとその兄弟たちが登場します。彼らはシケムの首長たちを信用させ、一緒に食事します。神殿で食事をするくらいですから、よほど信頼されたのでしょう。そしてガアルはアビメレクを片付ける、と豪語します。

(5月 28日)「士師記 15 : 14~20」

こう言い終わると、彼は手に持っていたあご骨を投げ捨てた。こうして、その場所はラマト・レヒ (あご骨の高台) と呼ばれるようになった。

(士師記 15 章 17 節)

・新しい縄 2 本で縛られたサムソンは、ペリシテ人のいるレヒに連れて行かれました。ペリシテ人たちは歓声をあげて、サムソンを迎えます。支配している民族の中から出た反逆者を、どうしてやろうかと声を上げるのです。

・しかしこのとき、主の霊が激しくサムソンに降りました。こういう場面を見ていると、やはりサムソンは神さまのご計画の中で行動しているようです。ただどうしても彼の残酷さは、受け入れづらいものです。

・サムソンはろばのあご骨で、何と 1000 人のペリシテ人を打ち殺したそうです。多少誇張があるかもしれませんが、「無割礼の者」の命はあまり重要視されていません。ただこの思想を受け入れてしまうと、大変危険です。

(5月 29日)「士師記 16 : 1~9」

デリラはサムソンに言った。「あなたの怪力がどこに秘められているのか、教えてください。あなたを縛り上げて苦しめるにはどうすればいいのでしょうか。」

(士師記 16 章 6 節)

・ティムナでペリシテ人の妻を迎えようとして騒動を起こしたサムソン。彼はそれでも士師としてイスラエルを裁いていたようです。ただ 20 年間の彼の士師としての功績は、聖書には何一つ書かれていません。

・サムソンは続いてガザの遊女のもとに入ります。ガザという地にも、遊女という職業にも、ナジル人はもとよりイスラエルの人とは決して近寄ることはありませんでした。サムソンはタブーを犯しているとも言えます。

・さらにサムソンは、デリラという女性に恋をします。なぜこのような人が士師としてイスラエルを裁いていたのでしょうか。今だったらすぐに、退任に追いやられるところです。案の定デリラは、ペリシテ人の領主たちに買収されていました。

(5月 26日)「士師記 15 : 1~8」

サムソンは出て行って、ジャッカルを三百匹捕らえ、松明を持って来て、ジャッカルの尾と尾を結び合わせ、その二つの尾の真ん中に松明を一本ずつ取り付けた。  
(士師記 15 章 4 節)

- ・サムソンはペリシテ人の妻との祝宴のときに、30人の客になぞをかけました。しかし妻の裏切りもあり、そのなぞを解かれてしまいます。サムソンは怒りに燃え、自分の父の家に帰ります。そしてその妻は、サムソンの友のものとなりました。
- ・しばらくしてサムソンは、妻(元妻?)を訪ねます。当然妻の父はサムソンが妻の部屋に入るのを拒みます。怒ったサムソンは、ジャッカルを使ってペリシテ人の麦畑を燃やしてしまうのです。
- ・今でいう「逆切れ」のような行動ですが、ペリシテ人は復讐の矛先をペリシテ人の妻とその父に向けます。ペリシテ人はその二人を焼き殺してしまうのです。こうしてサムソンとペリシテ人との関係は、陰悪なものとなります。

(5月 27日)「士師記 15 : 9~13」

彼らは言った。「我々はただお前を縛って彼らの手に渡すだけだ。殺しはしない。」彼らはこうして、新しい縄二本でサムソンを縛り、岩から連れ出し、上って来た。  
(士師記 15 章 13 節)

- ・サムソンはペリシテ人に対し、大暴れしました。「彼らを徹底的に打ちのめし」とまで書かれています。サムソンには彼なりの「大儀」があったようですが、結果はただの「人殺し」です。今の戦争と何ら変わりません。
- ・ただこのころ、ユダの人たちはペリシテ人の支配下にありました。ユダの人たちは、ペリシテ人の顔色をうかがいながら過ごしていたことでしょう。その中、こともあろうにサムソンは、ペリシテ人を徹底的に打ちのめしたのです。
- ・ユダの人たちは、サムソンをペリシテ人に渡します。自分たちは関係ない、ということなのでしょう。「容疑者を引き渡す」、しかしそれも怖かったようです。ユダの人々は 3000 人でサムソンの元に向かい、捕まえました。

(5月 4日)「士師記 9 : 30~33」

使者をアルマにいるアビメレクのもとに送って、こう言させた。「エベドの子ガアルとその兄弟がシケムに来て、この町をあなたに背かせようとけしかけしています。  
(士師記 9 章 31 節)

- ・エベドの子ガアルは、アビメレクを嘲っていました。そのことはシケムの首長たちの共感を得たようです。しかしその言葉に反感を持つ人もいました。町の長ゼブルです。彼はアビメレクの元に使者を送ります。
- ・どんな人でも、100%の支持を得ることは難しいことです。また町の長ともなれば、王からいろんな面で優遇されてもいたでしょう。そのこともあってか、ガアルの陰謀をアビメレクに伝えるのです。
- ・このような「密告」は、あらゆる作戦を無効にしまいます。しかし考えてみると、密告しそうな人がいる場でアビメレクを嘲ったのが、そもそもの間違いだっただけです。もう少し慎重さが欲しかったところです。

(5月 5日)「士師記 9 : 34~41」

しかし、アビメレクが追い上げ、ガアルは敗走することとなった。斬り倒された者は数多く、城門の入り口にまで及んだ。  
(士師記 9 章 40 節)

- ・昨日の箇所でも町の長ゼブルはアビメレクに対し、夜のうちに行動を起こし、明朝、日の出と共に町に攻撃をかけるように伝えました。ガアルが事を起こす前に、先手を打つように伝えたのです。
- ・ガアルは町の門の入り口に立っていました。そしてその横には町の長ゼブルがいました。ガアルはまさかゼブルが裏切っているとは思いませんでした。彼は山々の頂から部隊がやって来るのを見ます。
- ・人々の前でアビメレクを嘲った手前、ガアルは先頭に立って戦わざるを得ませんでした。しかしガアルは敗走することとなり、彼の兄弟も追い払われてしまいます。まさに、口は災いの元ということです。

(5月 6日)「士師記9:42~49」

アビメレクは、その日一日中、その町と戦い、これを制圧し、町にいた民を殺し、町を破壊し、塩をまいた。

(士師記9章45節)

- ・ガアルを打ち負かしたアビメレクは勢いづき、シケムと戦います。前日ガアルと共に祝宴を催し、神殿に行って飲んで食べたシケムの首長たちは、その勢いはどこへやら、一方的にやられてしまいます。
- ・アビメレクは民を殺し、町を制圧した後に塩をまきます。この行為が何を意味するのかは、よくわかりません。ただ、「清め」と関連しているように思います。シケムの首長たちは、神殿の地下壕に逃げ込みます。
- ・しかしアビメレクはその地下壕の上に枝を積み、火をつけます。非常に残酷な行為です。ヨタムが語った「この茨から火が出て、レバノンの杉を焼き付きます。(士師9:15)」という言葉が思い起こされます。

(5月 7日)「士師記9:50~57」

一人の女がアビメレクの頭を目がけて、挽き臼の上石を放ち、頭蓋骨を砕いた。

(士師記9章53節)

- ・勢いに乗ったアビメレクは、テベツという町も制圧します。なぜそこまで戦いを続けなかつたのでしょうか。欲望に任せて、次の町、次の町を狙う。戦争によく見られる場面です。
- ・しかしそこに落とし穴が待っていました。アビメレクはテベツにある堅固な塔の上から投げられた引き臼の上石によって、頭蓋骨を砕かれたのです。その上石を投げたのは、女性でした。彼は女性に殺されるのを良しとせず、従者にとどめを刺させます。
- ・4章17~22節の将軍セラがヤエルという女性に殺された場面を思い起こします。神さまはこうして、ヨタムの呪いを成就させます。エルバアル(ギデオン)の子アビメレクの物語は、こうして幕を下ろします。

(5月 24日)「士師記14:8~14」

サムソンは言った。「食べる者から食べ物が出た。強いものから甘いものが出た。」彼らは三日たっても、このなぞが解けなかった。

(士師記14章14節)

- ・サムソンの彼女に対する思いは、父母の反対を押し切りました。ただその背後には、神さまの思いがありました。昨日の4節には、「父母にはこれが主の御計画であり、主がペリシテ人に手がかりを求めておられることが分からなかった」とあります。
- ・神さまはサムソンを使って、ペリシテ人との間に不和をもたらそうとしているかのようです。サムソンはペリシテ人の妻の所に行き、宴会を催します。サムソンの父もそこに行きます。いわゆる披露宴です。
- ・そこでサムソンはなぞをかけます。ただこの「なぞ」ですが、どうやったら正解が導かれるのか、見当もつかないものです。獅子の死骸に蜜蜂の群れが集まっている所を見ても、多分答えられなかったでしょう。

(5月 25日)「士師記14:15~20」

宴会が行われた七日間、彼女は夫に泣きすがった。彼女がしつこくせがんだので、七日目に彼は彼女に明かしてしまった。彼女は同族の者にそのなぞを明かした。

(士師記14章17節)

- ・サムソンの目的は何だったのでしょか。宴会を盛り上げるためにクイズ大会をした！というのであれば、こんなにギスギスすることはなかったでしょう。30人の客は宴会を楽しむどころではありませんでした。
- ・サムソンがペリシテ人の女性を妻に迎えるところから、すべては神さまのご計画でした。ということはこのなぞかけの一連の出来事も、神さまの思いなのでしょか。日が経つにつれ、客も、妻も、心がざわめいていきます。
- ・結局サムソンは妻に執拗にせがまれたので、彼女になぞを明かしてしまいます。そして妻は、同族の客に明かします。サムソンは賭けに負けた分を、他の人を殺すことで払います。その際に主の霊が激しく彼に降っているので、これも神さまのみ心なのでしょか。

(5月 22日)「士師記 13 : 24~25」

この女は男の子を産み、その名をサムソンと名付けた。子は成長し、主はその子を祝福された。  
(士師記 13 章 24 節)

- ・主の御使いが告げたように、不妊の女性から男の子が生まれました。この出来事も、洗礼者ヨハネを生んだザカリアの妻、エリサベトを思い出します。彼女も高齢で、不妊の女性と言われていました。
- ・聖書の名前の中には、その言葉に意味を持つものも多くあります。サムソンとは、「太陽の(人)」、「(神に)仕えるもの」という意味があるそうです。彼はいわゆる「カリスマ」のように、育っていきます。
- ・幼少期をどのように過ごしたのかは、書かれていません。ただ「ナジル人」として敬虔な生活を送っていたのかというと、そうでもないようです。その物語は、明日以降に詳しく書かれています。

(5月 23日)「士師記 14 : 1~7」

サムソンは父母と共に、ティムナに向けて下って行った。ティムナのぶどう畑まで来たところ、一頭の若い獅子がほえながら向かって来た。

(士師記 14 章 5 節)

- ・サムソンはナジル人として、歩んできたはずですが。しかし今日の箇所を読む限り、敬虔な生き方はしていなかったようです。まずぶどう畑に彼は行きますが、ナジル人はぶどうの木から出来るものは一切食べてはいけませんでした。
- ・確かに、ただ近くを通っただけかもしれません。しかし「動物の血」のような汚れから自分の身を避けなければならないのに、自らの手で獅子を裂いてしまいます。どんなに気を付けても、当然血まみれになってしまうはずですが。
- ・そしてよりによって、ペリシテ人(外国人)を妻に迎えたいということ。ただでさえイスラエルの人たちは、他の民族と血が混じるのを良しとしました。サムソンはナジル人です。なおのこと厳しいはずなのに、ということですが。

(5月 8日)「士師記 10 : 1~5」

彼には三十人の息子があつた。彼らは三十頭のろばに乗り、三十の町を持っていた。それらは今日もハボト・ヤイルと呼ばれ、ギレアドの地にある。

(士師記 10 章 4 節)

- ・ここで物語は、小休止に入ります。オトニエル、エフド、バラク、デボラ、ギデオンといった人たちは「大士師」と呼ばれ、その活躍は聖書に詳しく書かれています。そのあとギデオンの子アビメレクは、兄弟たちを殺害するという大きな罪を犯します。
- ・そのあとに出てくる二人の士師、トラとヤイルは、「小士師」と呼ばれます。「大士師」が他民族からの圧迫から民を救う士師であるのに対し、「小士師」は外敵の攻撃とは直接関係しない裁判人や仲裁者を指すそうです。
- ・トラは 23 年間、ヤイルは 22 年間、イスラエルを裁きました。その期間の大きなもめ事は、聖書には記されていません。ヤイルには 30 人の息子があつたそうです。神さまの祝福が豊かに与えられたということです。

(5月 9日)「士師記 10 : 6~16」

彼らが異国の神々を自分たちの中から一掃し、主に仕えるようになったので、主はイスラエルの苦しみが耐えられなくなった。

(士師記 10 章 16 節)

- ・「水戸黄門」や「遠山の金さん」のように、あるフォーマットにしたがって進んで行く時代劇は、ある種の安心感を覚えます。しかし士師記でのフォーマットのなぞらえは、「またか!」という思いしか生まれてきません。
- ・イスラエルの人々は、またもや主を捨て、他の神々に仕えます。書いてあるだけで 7 つの神々です。ただ今回、いつもの流れと違うのは、士師が立てられる前に人々が罪を告白したということです。
- ・これまでは、民はただ苦しみを叫んでいるだけでした。しかし今回は、「わたしたちはあなたに罪を犯しました」と告白します。そして異教の神々を、自分たちの中から一掃するのです。その思いが、神さまに伝わるのでしょうか。

(5月10日)「士師記10:17~18」

民ギレアドの指導者たちは互いに言い合った。「アンモンの人々に戦いを仕掛けるのは誰だろうか。その人が、ギレアド全住民の頭となろう。」

(士師記10章18節)

- ・アンモンの人々は、イスラエルに対して陣を敷きます。イスラエルの人たちは自分たちの主を捨て、他の神々に仕えていました。しかし圧迫され、神さまに助けを求めます。その結果、アンモンとイスラエルの間には緊張が走ったのでしょうか。
- ・そもそもなぜ、イスラエルの人たちは他の神々に仕えたのでしょうか。何事も「乗り換え」をする際には、リスクがつきものです。一つ考えられるのは、イスラエルの神が厳しすぎたということかもしれません。
- ・異教の神々に仕えた人たちが「姦淫にふけた」という記事が、聖書には見受けられます。そのような欲望を許してくれる神々を、人々は求めたのでしょうか。それとも目に見える「ご利益」が、ニンジンのようにぶら下がっていたのでしょうか。

(5月11日)「士師記11:1~3」

エフタは兄弟たちから逃れて、トブの地に、身を落ち着けた。そのエフタのもとにはならず者が集まり、彼と行動を共にするようになった。

(士師記11章3節)

- ・士師記に限らず聖書には、様々な境遇の人が登場します。アブラハムの最初の息子イシュマエルは、妻サラの女奴隷ハガルとの間に生まれた子どもでした。そして今回登場するエフタは、遊女の子だったそうです。
- ・新約聖書には、娼婦という人たちが出てきます。遊女と同じような意味で使われるようです。娼婦は罪人や徴税人、異邦人と共に差別され、共同体の中から排除されていました。同じように遊女も差別されていたようです。
- ・そのためエフタの父ギレアドの妻の子どもたちは、エフタを見下していたようです。日本的にいうと、「妾の子」ということでしょうか。そもそも父ギレアドが、欲望に負けてしまったのが原因なのですが。

(5月20日)「士師記13:8~18」

主の御使いは、「なぜわたしの名を尋ねるのか。それは不思議と言う」と答えた。

(士師記13章18節)

- ・マノアは不妊の妻から、神の人に出会ったこと、そして子どもが生まれると告げられたことを伝えます。するとマノアは神さまに祈り、もう一度神の人を送って欲しいと願います。妻の言うことだけでは信じることはできなかったのでしょうか。
- ・主の御使いは再びマノアの妻のところに現れます。妻は急いでマノアを呼び、今度は二人そろって主の御使いの言葉を聞きます。そしてその子をナジル人として育てるようにと再度告げるのです。
- ・ナジル人とは、「分離された者」という意味です。ぶどう酒や強い飲み物を遠ざけ、また汚れた物も食べない。洗礼者ヨハネを思い出します。しかし読み進めていけば分かりますが、サムソンは決して「清い」とは言えない生活を送ります。それは「不思議」です。

(5月21日)「士師記13:19~23」

主の御使いは再びマノアとその妻に現れることがなかった。マノアはそのとき、この方が主の御使いであったことを知った。

(士師記13章21節)

- ・マノアとその妻は、主の御使いに焼き尽くす献げ物と穀物の献げ物をささげます。すると主の御使いは、祭壇の炎と共に上っていきます。この当時、神さま(あるいはそのみ使い)を見てしまうと、死ぬと考えられていました。
- ・ただマノアの妻は、もし自分たちを死なせるのであれば、献げ物を受け取らなかつたらと指摘します。確かにマノアとその妻が生きていないと、イスラエルを裁く次の士師は生まれません。
- ・ところでここまで何度も、「マノアの妻」と書いています。彼女は士師記の中でもかなり重要な役割を持つ女性です。しかしその名前は残されていません。なぜなのでしょう。その理由はわかりません。

(5月18日)「士師記12:13~15」

彼には四十人の息子と三十人の孫がいて、七十頭のろばに乗っていた。彼は八年間、士師としてイスラエルを裁いた。

(士師記12章14節)

- ・次に出てくる士師は、アブドンです。彼は8年間、士師としてイスラエルを裁きます。明日以降登場するサムソンがとても有名ですから、ここは小休止といったところでしょうか。彼も小士師の一人です。
- ・彼には40人の息子と30人の孫がおり、70頭のろばに乗っていたそうです。息子の数に驚愕しますが、この時代、子どもがたくさん与えられることは神さまの祝福のしるしでした。多少誇張はあるとしても、「祝福された士師」ということを強調しているのです。
- ・彼は死んだあと、アマレク人の山、エフライムの地にあるピルアトンに葬られます。アマレクもエフライムも、エフタの時代に争った人たちでした。どうしてそのような場所に葬られたのでしょうか。

(5月19日)「士師記13:1~7」

イスラエルの人々は、またも主の目に悪とされることを行っただけで、主は彼らを四十年間、ペリシテ人の手に渡された。

(士師記13章1節)

- ・士師記では、「またも主の目に悪とされることを行っただけで」という言葉がフォーマットのように使われます。イスラエルの人たちは何度も、神さまから離れるという罪を犯してしまうのです。
- ・ただここでは、イスラエルの民は助けを求めています。40年間という長期間ペリシテ人の手に渡されているのにも関わらずです。もしかしら彼らは、その境遇を受け入れていたのかもしれませんが。
- ・今回の士師物語は、神さまの一方的な思いの中で進んでいきます。主の御使いが不妊の女であるマノアの妻に現れ、子どもが生まれることを告げます。さらにその子をナジル人としてささげなさいと命じるのです。ナジル人については、明日解説しましょう。

(5月12日)「士師記11:4~13」

彼らはエフタに言った。「帰って来てください。わたしたちの指揮官になっていただければ、わたしたちもアンモンの人々と戦えます。」

(士師記11章6節)

- ・エフタは兄弟たちによって、家から追い出されていました。それは彼が、遊女の子だからです。今の社会では父親に「認知」をさせ、正式な相続人になることができますが、当時は違ったのでしょうか。
- ・ただ、「雑草魂」とでも言いましょうか、厳しい環境の下で生きてきた人は強いものです。彼を追い出した兄弟たちは逆に、戦うことなどまるでできなかったのかもしれませんが。ともかくギレアドの長老たちは、エフタに戦ってくれるように願います。
- ・このときの、兄弟たちの心境はどうだったのでしょうか。長老たちはアンモン人を破ったら、エフタを頭にすると約束しました。もしそれが実現したらどんな目に合うか、ヒヤヒヤしていたことでしょうか。

(5月13日)「士師記11:14~28」

しかし、アンモン人の王は、エフタが送ったこの言葉を聞こうとはしなかった。

(士師記11章28節)

- ・3節には、「エフタのもとにはならず者が集まり、彼と行動を共にするようになった」と書かれています。ある国の大統領が他の国のことを「ならず者国家」と呼んだことを思い出します。
- ・しかしエフタはまず、アンモンの王に使者を送ります。いきなり戦いを始めるのではなく、外交的な解決を図ろうとしたのでしょうか。彼はアンモンの王に対し、これまでのいきさつを伝えていきます。
- ・ただアンモンの王は、エフタの言葉を聞こうとはしませんでした。その根底に、「どうせ彼は遊女の子だから」という思いもあったのかもしれませんが。また周りにならず者ばかりを従わせているエフタのことを、軽く見ていたのかもしれませんが。

(5月14日)「士師記11:29~33」

こうしてエフタは進んで行き、アンモン人と戦った。主は彼らをエフタの手にお渡しになった。  
(士師記11章32節)

- ・ここまでのエフタの物語は、極めて順調でした。彼は家を追い出されたにもかかわらず、長老の頼みで大きな仕事に向かいます。そしてアンモンの王とのやり取りの後、主の霊がエフタに臨んだのです。
- ・ここでそのまま出陣していても、アンモン人には勝利したのかもしれませんが。しかしエフタは、主に対して誓いを立てるのです。もし勝利したなら、「わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものといたします」と誓うのです。
- ・この誓いによって何が起こったのか、それは明日の箇所で分かります。ただ当時、戦いから帰って来る兵士をタンバリンや笛を持って出迎えるのは、女性の役割でした。そのことをエフタは忘れていたのでしょうか。

(5月15日)「士師記11:34~40」

二か月が過ぎ、彼女が父のもとに帰って来ると、エフタは立てた誓いどおりに娘をささげた。彼女は男を知ることがなかったので、イスラエルに次のようなしきたりができた。  
(士師記11章39節)

- ・イエス様は山上の説教で、こう言われました。「また、あなたがたも聞いているとおおり、昔の人は、『偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはならない(マタイ5:33~34)」。
- ・このエフタの誓いが、神さまの怒りに触れたとは考えにくいですが。しかし軽々しく誓いの言葉を口にしてしまったから、とも言えます。戦いに勝利したエフタを待っていたのは、自分の一人娘でした。
- ・彼女は父エフタの誓いを受け入れます。このあたりの感情は、なかなかわたしたちには理解できないことです。それほど神さまを畏れていた、そういうことなのでしょう。悲しみの中、娘は2か月間を過ごし、そして神さまにささげられました。

(5月16日)「士師記12:1~7」

「ではシボレトと言ってみよ」と言い、その人が正しく発音できず、「シボレト」と言うと、直ちに捕らえ、そのヨルダンの渡し場で亡き者にした。そのときエフライム人四万二千人が倒された。  
(士師記12章6節)

- ・エフタは、アンモン人を打ち破りました。しかしその時に主に誓ったことにより、娘を神さまにささげることになってしまいます。そんな中、エフライムの人たちが、なぜ自分たちも戦いに加えさせてくれなかったのかと、エフタに文句を言います。
- ・エフライム人は「あなたの家をあなたもろとも焼き払ってやる」とまで言っているのに、文句というレベルは遥かに超えています。ただ娘を亡くしたエフタには怖い者がなかったのかもしれませんが。
- ・エフタはエフライムを打ち破ります。さらにヨルダンの渡し場を手中に収め、エフライムを逃げようとした者も捕らえます。その見極めは、シボレトと正しく言えるかどうかでした。訛っているかどうか、ということでしょう。

(5月17日)「士師記12:8~12」

その後、ゼブルンの人エロンが、士師としてイスラエルを裁いた。彼は十年間、イスラエルを裁いた。

(士師記12章11節)

- ・ギデオン、エフタと暴力的な士師に比べ、イブツァン、エロンという二人の士師は穏やかに紹介されます。まずイブツァンは、ベツレヘム出身だったようです。ベツレヘムというと、イエス様がお生まれになった地です。
- ・少し前に出てきた士師トラは23年間、ヤイルは22年間、士師としてイスラエルを裁きました。しかしエフタは6年、イブツァンは7年、エロンは10年と、比較的短い期間で士師が交代しています。
- ・政治の世界でも、トップが頻繁に交代することは不安定要素として語られることがあります。逆にトップがいつまでも変わらないと、権力が集中するという恐れもあります。一体、どちらがいいのでしょうかね。